

特集 市民参加
あなたの一步が世界を変える

メラピ山噴火に関する語り部の番組。過去の経験を掘り起こし、次の災害に備えるための知恵を語り継いでいく



まるでようになり、どんな番組を流せばいいのか、どうすれば復興を進められるかなど意見を交わした。「いつの間にか、ラジオが人々をつなぎ、住民同士が力を合わせるきっかけをつくっていました」と振り返る日比野さん。FMわいわいは、住民が運営し、参加し、地域のために放送する「コミュニティラジオ」となっていた。

震災からしばらく経っても、長田区の住民同士をつなぐ拠点となり続けたFMわいわい。現在も約200人のボランティアを中心に、ラジオ放送だけでなく、食事

10言語でコミュニティに災害情報を発信

「アンニョハセヨ。皆さんこんにちは。こちらは77・8MHz、FMわいわい。これから放送でお届けします」。軽快な音楽とともに、正午のラジオ番組が始まった。兵庫県神戸市長田区にあるラジオ放送局、FMわいわい。日本では珍しく、ベトナム語、中国語、英語、ポルトガル語など10の言語に対応。NPO法人エフエムわいわいが運営し、番組ごとに使用言語が変わる。外国人の多いこの地域で人気の局だ。

多言語放送がこの地で始まったのは、ある背景がある。それは1995年1月17日、阪神・淡路大震災。震源地に近い長田区では、建物のほとんどが倒壊、全焼し、住民の多くは何カ月にもわたり避難生活を強いられた。

その中には、この地域の人口の



ラジオ放送に欠かせない機材の操作方法を指導する日比野さん(右)

神戸 & インドネシア

約1割を占める外国人の姿があった。「彼らの中には日本語ができない人も多かった。炊き出しや救済物資などの情報が分からず、不安そうにしていました」。そう話すのは、当時、避難所でボランティアをしていた日比野純一さん。心細い避難生活を送る外国人を安心させたい。そこで、誰もが参加できるラジオ放送局として誕生したのがFMわいわい。震災発生からわずか数カ月後、日比野さんら被災地の日本人と外国人が協力して立ち上げた。地域に住む外国人の言語で生活情報を伝えたり、各国の音楽を流したりと、少しでも避難所の仲間たちの癒やしになればと必死に活動した。

このラジオの評判は、避難所から避難所へと広まり、「この情報も流したい」「あの言語でも放送したい」と次々とアイデアが寄せられるように。国籍、民族、障害の有無を超えてラジオ局に人が集

災害の経験を伝え次に備える

会や交流イベント、防災訓練など、コミュニティに根差した活動を続けている。

そして、その活動の舞台は世界へ。FMわいわいは、110カ国、約4000の団体が加盟する「世界コミュニティラジオ放送連盟」の一員。この組織を通じて同じ災害多発国であるインドネシアのコミュニティラジオ局「リントラス・メラピFM」などと連携し、災害時に、そして災害に備えてどのような活動を行ってきたか、互いの経験を共有しながらノウハウを磨いてきた。

その矢先だった。2010年10月、ジャワ島中部にあるメラピ山が大噴火。辺り一面に噴煙が立ち込め、周辺の村々を火砕流や土石流が襲った。住民の多くは、どう逃げればいいのか分からず、火山の知識がないために途方もない恐怖を感じていた。

しかし、リントラス・メラピFMがある村は違った。普段からラジオ放送やコミュニティ防災活動を通じて、噴火時の避難方法や噴火の仕組みなどを学んでいた住民たち。その効果もあり、被害を最

ラジオが高める防災力

ラジオを通じて災害や生活情報を多言語で発信してきたNPO法人エフエムわいわい。その経験を共有したいと、インドネシアのラジオ放送局と住民の防災意識の向上に取り組んでいる。



FMわいわいのスタジオ。この日は、福島県双葉郡富岡町から避難している人たちに情報を発信する「おだがいさまFM」と電話中継

小限にとどめることができたのだ。

メラピ山は今後もいつ噴火するか分からない。この経験は他の地域にも伝えなければ。エフエムわいわいは2012年、JICAの根技術協力事業を通じて、コミュニティラジオを核に、メラピ山周辺地域の防災対策に乗り出した。

対象となるのは、メラピ山麓にある5つの放送局と6つの村。その中には噴火後に設立された局も。ラジオになじみのない住民が多く、いきなり放送しても聞いてもらえない。そこでまずは、地域ぐるみで災害に立ち向かう重要性を伝えることに。住民を対象に「防災とは何か」「どんな災害対策ができるか」などを話し合うワークショップ、防災教育ゲームや炊き出し訓練などのイベントを通じて、住民の結束力を高めていった。そして、その活動の告知や成果を伝えるために使ったのがラジオだ。

さらに日比野さんらが提案したのが、被災者が「語り部」となる番組をつくること。「阪神・淡路大震災の教訓を受け継いでいくため、私たちは被災者の経験を紹介する番組を放送しています。自分の身をどう守るべきか、多くの人と共有すればするだけ、地域の防災力が高まるからです」。インドネシアの人々もこの案には大賛成。メラピ山の噴火の語り部たちが、各局でその体験談を発信し始めている。

「コミュニティラジオは、9割のコミュニティ活動と1割の放送活動で成り立っている」という言葉があります。住民参加型のコミュニティラジオづくりに懸命に取り組む、自分たちの地域を自分たちの手で守ろうとする彼らの熱意に触れると、私たちも原点に立ち返ることができるといいます」と日比野さんは目を細める。

リントラス・メラピFMの代表、スキマンさんは「エフエムわいわいは、噴火前から何度も足を運んでくれ、協力してきた仲間です。この先も学び合いながら、互いの地域を守っていききたい」と話す。日本とインドネシアのコミュニティラジオが共に目指すのは、災害に強い地域づくりだ。



子ども向けの防災教育について話し合う住民たち。女性たちがその中心だ



インドネシアの活動現場にフィールドスタディーで訪れた日本の学生たち。「日本の若者にも途上国の人々と交流し、現状について知ってもらいたい」と日比野さん